

江戸時代の和刻本仏典の出版と黄檗版大蔵経

成田山仏教図書館蔵『阿毘達磨俱舍論』を手がかりに

會 谷 佳 光

日本の出版文化はその萌芽期から仏教とともに発展してきたといっても過言ではない。江戸時代に入り、外典の出版も盛んになったが、仏典出版が質的にも量的にも出版文化の隆盛を牽引していたことに異論はないであろう。その出版は主に各宗寺院・書林が行ったが、なかでも後世への出版文化に対する影響という点で注目すべきは、黄檗宗による黄檗版大蔵経（以下「檗蔵」）の出版である。檗蔵は、寛文九年（一六六九）、鉄眼道光（一六三〇～一六八二）の発願募縁によって黄檗山宝蔵院¹で開板され、天和元年（一六八一）にひとまず完成を見た。その底本には万治元年（一六五八）に大坂の勝性印が隠元隆琦（一五九二～一六七三）に寄進した嘉興版大蔵経（以下「嘉興蔵」²）が版下として使われたと見られるが、完本ではなかつたらしく、松永知海氏等の調査・研究によって、初期の刷り本のなかには嘉興蔵とは異なる版式の版が混入していたことが徐々に明らかにされてきている⁴。檗蔵に混入された異版 一般に「入れ版」と呼ぶ には和刻本・朝鮮版等があるが、時代が下るに従い、それらが嘉興蔵の覆刻本にすげ替えられていく傾向にあり、現在では、入れ版の底本の問題や、改刻の時期・方法・背景等の究明に焦点が当てられている⁵。本稿では、檗蔵の入れ版問題について、成田山仏教図書館が所蔵する唐・釈玄奘訳『阿毘達磨俱舍論』（以下「俱舍論」）の版本三点を起点として考察することで、江戸時代の和刻本仏

典の出版において槧蔵の出版がいかにかかわっていたかを明らかにしたい。

一 成田山仏教図書館蔵本三点

成田山仏教図書館では、この三点を、いずれも大蔵経の一部としてではなく、単独の書として所蔵する。これらが大蔵経の離れ本か単行本かは次節で検討するとして、まず三点の書誌を紹介しておきたい。

阿毘達磨俱舍論三十卷附音釈 全九冊 請求番号四八 三〇〇（以下「成本（イ）」又は「（イ）」と略す）

双辺二十一・一×十四・二 無界十行二十字 無魚尾白口 無点

首「扉絵」（裏云「皇図鞏固 帝道遐昌／仏日増輝 濃輪常転」）次「阿毘達磨俱舍論卷第一／尊者世親造／唐三蔵法師玄奘奉詔訳」

師玄奘奉詔訳」 以下至卷第三十 一部卷末有音釈 版心題「阿毘達磨俱舍論」 無刊記 題簽題「阿毘達磨俱舍論」

又題簽上部に「論」とあり 印記「私立成田／図書館／藏書之印」「望洋／樓章」 書入「佐渡 大幢」「信海」

阿毘達磨俱舍論三十卷附音釈 全十冊 請求番号四八 三〇〇（口）（以下「成本（口）」又は「（口）」と略す）

双辺二十一・一×十四・二 無界十行二十字 無魚尾白口 送返縦点

首「阿毘達磨俱舍論卷第一／尊者世親造／唐三蔵法師玄奘奉詔訳」 以下至卷第三十 一部卷末有音釈 次天和三年釈

忍激（刊語）（埋木） 版心題「阿毘達磨俱舍論」 無刊記 題簽題「阿毘達磨俱舍論」又題簽上部に「論」とあり

無印 書入「下サイヲ力長観」「永寿賢道」

阿毘達磨俱舍論三十卷附音釈 日本釈竜謙校点 全十冊 請求番号四八 三〇〇（ハ）（以下「成本（ハ）」又は「（ハ）」と

略す）

双辺二十一・一×十四・二 無界十行二十字 無魚尾白口 送返縦点 眉注（校記）

首弘化二年釈隆栄「校刻阿毘達磨俱舍論序」 次釈宝雲「阿毘達磨俱舍論序（版心）」 次「阿毘達磨俱舍論卷第一／尊者世親造／唐三藏法師玄奘奉詔訳」 以下至卷第三十 一部巻末有音釈 次天和三年釈忍激（刊語）（埋木） 次弘化二年釈大含「題俱舍論校点後」 版心題「阿毘達磨俱舍論」 無刊記 題簽題「阿毘達磨俱舍論」 又題簽上部に「論」 下部に「校／書」とあり 印記「南弘房」「宥哲」 書入「房州 智眼」

版式はいずれも十行二十字、匡郭線は版心部分の天地にはかからず、半丁ごとに本文の四周を双边で囲み、版心は上部・中部・下部にそれぞれ単線の枠があり、上部には大蔵経内の論蔵の書籍であることを示す「論」字、中部には書名・巻数・丁数、下部には檠蔵の整理番号である千字文が離られ、字体は縦線が太く横線の細い明朝体である。これらの特徴は嘉興蔵版一般に典型的な特徴であるから、三点とも嘉興蔵版の覆刻本と見てよい。

(イ) は版式が檠蔵一般と近似し、巻首には檠蔵にまみ見られる扉絵があり、一部巻末に墨丁（後に募縁刊記を刻するための未刻の墨刷部分）が残されていることから、檠蔵の離れ本の可能性がある。しかしながら檠蔵中の覆嘉興蔵版には、檠蔵の開版当初に刊刻されたものもあれば、当初は既存の版本によって入れ版され、後に覆嘉興蔵版が離られて入れ版とすげ替えられた場合がまみ見られるから、(イ) が檠蔵の改刻本である可能性もないとはいえない。なお書き入れの「信海」・「佐渡 大幢」は、新義真言宗の智積院三十七世信海（一七八三～一八五六）、字大幢のことであろう。信海はその師、智積院三十二世海心（一七七二～一八三三、佐渡の人）とともに智山俱舎の双壁とされ、智積院における俱舎学の盛行に寄与し、著に『俱舎論玄談』一卷・『俱舎論分科』二巻がある。信海によるものかどうかは明らかでないが、(イ) には珍しい書き入れがあり、これらが信海の俱舎学形成にながしかの役割を果たしたことは確かであろう。なお「望洋／楼章」は、私立成田図書館（現成田山仏教図書館）の創設者成田山中興十五世石川照勤僧正の蔵書印である。

(イ) に対し、(ロ)・(ハ) には、檠蔵特有の扉絵や墨丁等は見られない。また巻第三十第十六丁表には「新訳俱舎論凡三十巻以洛東獅谷升蓮社／蔵本鏤梓行世／天和癸亥四月初八之日」の刊語があり、その末には「信／阿」・「忍激／之印」

の墨刷印記があり、墨刷印記を含めてすべて埋木となっている（本稿末【書影2】）。この刊語は、槩蔵一般の刊記 募縁者名・開版書名及び巻次・願文・開版年等を黄檗山宝蔵院、又は鉄眼の名のもとに刻した木記 と異なり、宝蔵院でも鉄眼でもなく、槩蔵がひとまず完成をみた二年後の天和三年（一六八三）に、忍澁（一六四五〜一七一）が升蓮社の蔵本を底本に刊行したテキストであることを伝えている。印記の「信阿」は忍澁の字であり、忍澁は延宝八年に知恩院第三十八世万無和尚の発願により法然ゆかりの地である鹿ヶ谷に法然院を建立し、槩蔵と建仁寺蔵の高麗版大蔵經とを対校したことなどで知られる。「升蓮社」は、忍澁の蓮社号である。⁽⁸⁾『獅谷白蓮社忍澁和尚行業記』巻上によれば、『俱舎論』を刊行した天和三年は、法然院に住して三年目のことであり、他に自著の『三心私記哀益』三巻を刊行している。なお忍澁による『俱舎論』の刊行は、槩蔵完成後のことであるから、忍澁刊本は槩蔵とは関係ないとの見方も当然あるが、後節で述べるように、槩蔵本『俱舎論』についていえば、ことはそれほど単純ではない。

(口)・(ハ)は匡郭サイズ・各巻の丁数・巻末の墨丁の有無が一致し、ともに送返縦点があり、本稿末の【俱舎論附点本版面状態対照表】を見れば明らかのように、版面の状態にも共通する部分が散見するので、同版と見て間違いない。版の先後については、巻第三十第十五丁匡郭左辺下部は、(口)ではかなり傷んでいるものの、匡郭線が残っているのに対し、(ハ)では欠損する等、(ハ)の方が痛みが多いので後印と見てよい。

ところで、(ハ)の巻首にある「校刻阿毘達磨俱舎論序」には、

然旧国字頗有参差。初学之者病諸尚矣。今也有好古人、請校正於不敏。…冠顯文字之異、問正伝写魯魚、並改国字舛錯。寡聞单思、刪定有謬、庶幾博達正之云爾。弘化二年乙巳夏四月洛東智積池舍沙門竜謙謹撰。

然るに旧の国字に頗る参差有り。初学の者これを病めること尚し。今や好古の人有り、不敏に校正を請う。…冠に文字の異を顕かにし、間に伝写の魯魚を正し、並びに国字の舛錯を改む。寡聞单思なれば、刪定に謬り有らん。庶幾くは博達これを正せと云爾。弘化二年（一八四五）乙巳夏四月、洛東智積池舍沙門竜謙、謹んで撰す。

とあり、序の末には「釈氏ノ隆栄」「竜ノ謙」の墨刷印記がある。この序の著者は、隆栄（一八〇九〜一八六七）、字竜謙、新義真言智山派の僧で、智積院三十九世、著に『俱舎論玄談』・『俱舎論分科』があり、弟子に『冠導阿毘達磨俱舎論』を著した佐伯旭雅等がいる¹⁰。弘化二年は智積院研学時代に当たり、翌年には集議席に進んでいる。序によれば、以前から『俱舎論』の訓点に不満の声があり、智山俱舎学を学ぶ隆栄に白羽の矢が立って校正することになり、眉上に文字の異同を記して本文の誤脱を正し、訓点の誤りを改めたとのことである。実際、本文の上欄外には単枠で囲まれた校記が至る所に埋木されている。改点の例としては、卷第三十第五丁裏の頌の第二句「至此時与果」を（ロ）では「此ノ時ニ至テ果ヲ与フ」と読むように訓点を附すのに対し、（ハ）では「此ノ時ニ至テ与果スル」と読むように改められており、序にいうとおり、（ハ）は隆栄が（ロ）と同じ版木に対して校正改点を施したテキストなのである。

（イ）・（ロ）・（ハ）は、同じ覆嘉興蔵版なので一見非常によく似ているが、（イ）は（ロ）・（ハ）と匡郭サイズ・版面の状態（傷・ゆがみ等）が異なり、なおかつ無点であり、異版に間違いない。さらに本稿末の【俱舎論諸本丁数冊次対照表】を見ればわかるように、（イ）と（ロ）・（ハ）とでは、丁数に一部異同がある。丁数が異なるのは卷第八第九第二十五第二十九であり、いずれも（ロ）・（ハ）が一丁少ない。（イ）に多い一丁には、それぞれ巻末の音釈・墨丁のみが刷られていて、末丁の前丁には、本文と末題までの間に、音釈がなんとか入る位の空き行が存する。これに対し、一丁少ない（ロ）・（ハ）では、いずれも末丁裏の末行まできっちり印字されていて、墨丁はなく、音釈はこの末丁内に刷られている。覆刻に当たって、元版に音釈・墨丁（又は刊記）のみの一丁がある場合、音釈を前丁に押し込み、墨丁（又は刊記）をなくしさえすれば、まるまる一丁減らせるのであって、考えようによっては、（ロ）・（ハ）はこれを実行したものと見ることもできる。実際、元版たる東京大学総合図書館所蔵の嘉興蔵版『俱舎論』（崇禎十年十一年径山寂照菴刊本）を見ると、この四巻の丁数はすべて（イ）と一致する。よって（イ）は（ロ）・（ハ）の訓点を削り無点本に改刻したものではなく、これこそ嘉興蔵版本来の姿を伝えるのであって、（ロ）・（ハ）は丁数減らしのため、嘉興蔵版本来の姿をあえて崩している

ことがわかる。(イ)が無点本であることを考え合わせると、(イ)は(ロ)・(ハ)に比べ、嘉興蔵版をより忠実に覆刻したといえよう。

さて、先述のように、(ハ)には隆栄の校記が眉上の随所に埋木されているが、注目すべきは卷三十一丁表に「心部 磔作生都正」(「心部」二字は、磔蔵本が「生都」に作るのが正しい)とある点である。この二字は附点本(ロ)・(ハ)の本文ではいずれも「心部」に作るのに対し、(イ)・嘉興蔵版ともに「生都」に作る。この校記は、(イ)が磔蔵本であることを示唆すると同時に、隆栄が天和三年忍激刊附点本と異なる本文を持つ磔蔵を、その校勘対象に選んでいることから、天和三年忍激刊本が磔蔵本ではなかった、少なくとも隆栄が校勘した当時は磔蔵本とはみなされていなかったことを意味する。

以上、成本三点から、覆嘉興蔵版には少なくとも(イ)無点本と、(ロ)・(ハ)天和三年忍激刊附点本という二系統の版本が存し、このうち(イ)の装丁と本文の特徴が磔蔵本に近く、そのオリジナルたる嘉興蔵版により忠実であることがわかった。次節では、磔蔵では実際にどのような版の『俱舍論』を収録していたかを確認し、成本との関係を考察してみたい。

二 磔蔵所収本と成田山仏教図書館所蔵本の関係

磔蔵には近年に至るまで独自の蔵経目録がなく、開板当初からその代用として『大明三蔵聖教目録』が利用されてきた。『大明三蔵聖教目録』は、一九二九年四月に大正新脩大蔵経刊行会によって排印されて、『昭和法宝総目録』第二巻に収録され、排印の際には各著録經典に「一から一六五六までの通番が附された¹²⁾。この『昭和法宝総目録』所収本の利便性や、現在二千箇所に伝わるとされる磔蔵の普及度もあり、磔蔵独自の目録の必要性はなかなか認められなかった。上越教育大学附属図書館による全蔵調査を皮切りに、仏教大学の松永知海氏の教導によって、磔蔵独自の目録を作る必要性がようやく認識されるようになり、寺院や図書館等が所蔵する磔蔵の現存目録が次第に刊行されはじめている。そこでまず、これら磔蔵の現存

目録を使って、燬蔵の印造時期によって、どのような版の『俱舎論』を収録しているかを見てみたい。

【正明寺蔵本】(『正明寺燬蔵目録』による)

東一 六函第一五九帙(帙号九六) 阿毘達磨俱舎論三十卷 全九冊 千字文楼一至十観一至十飛一至十

【法然院蔵本】(『法然院燬蔵目録』による)

第四一函第四帙 阿毘達磨俱舎論三十卷 全九冊 送返等点あり 千字文楼一至十観一至十飛一至十 卷三十末丁表に
天和三年忍激刊記あり。書き入れとして、宝永五年釈秀廓等による麗蔵との対校あり。

【上越教育大学蔵本】(『上越教育大学燬蔵目録』による)

第一五九帙 阿毘達磨俱舎論三十卷 全九冊 千字文楼観飛 第一冊首、第九冊末に絵あり

現存目録が公刊されている燬蔵のうち、『俱舎論』を存するのは、管見の限りではこの三蔵だけである。次に、燬蔵所収本と成本三種の関係について検討してみたい。

正明寺所蔵の燬蔵は、延宝六年(一六七八)から天和元年頃の施入である。¹³⁾未調査のうえ、「正明寺燬蔵目録」には『俱舎論』の書影も収録されていないため、いかなる版かは目録上の記載だけでは判断しかねるが、【俱舎論諸本丁数冊次対照表】を見ると、その丁数は(イ)と一致する。

法然院所蔵の燬蔵は、延宝二年頃から宝永四年(一七〇七)にかけて納入されたものである。法然院本も未調査ではあるが、『法然院燬蔵目録』によると、(ロ)・(ハ)と同じく附点本であり、『目録』所載の卷第三十第十六丁表の書影では、天和三年忍激刊語が埋木され、匡郭左辺中程に傷があることが確認できるから、(ロ)・(ハ)と同じ版木で刷られた忍激刊本であり、(イ)とは別版であることがわかる。

上越教育大学所蔵の燬蔵は、文政四年(一八二二)に越後国の宮崎甚助が購入したもので、全蔵が一括納入されている。『俱舎論』は無点のうえ、本稿末【俱舎論無点本版面状態対照表】・【俱舎論諸本丁数冊次対照表】を見ればわかるように、

各巻の丁数・版面の状態において(イ)と共通する点が多いから、これと同版と見てよい。なお、これら【対照表】を見ると、両本には墨丁の存否・大小に異同がある巻が存する。例えば、(一)巻第三第五第八第九第十四第十八の墨丁は、(イ)では匡郭内一杯に刷られているのに対し、上越大本では他の槧蔵刊記並の大きさであり、(二)巻第四第十五第十七第二十の墨丁は、(イ)にあつて上越大本にはなく、(三)巻第六第十第十二第十三第十九の墨丁は、上越大本にあつて(イ)にない。しかし子細に見てみると、(一)・(二)のケースはいずれも(イ)の墨丁が上越大本のときに、一部又はすべてが削りとられていたために生じたものである。(三)のケースは、上越大本で墨丁のある部分に対して、(イ)ではその上下の匡郭線からしてないことから、版木に墨丁がなかったのではなく、刷る段階でこの部分に墨を付けなかったのである。要するに、いずれも(イ)から上越大本へと墨丁が減少していく傾向にあるのであつて、二本が異版であることを意味するものではない。加えて、上越大本の方が傷が多いことから、上越大本が後印であると見てよい。

以上をまとめると、正明寺本は丁数から見て、(ロ)・(ハ)ではなく、嘉興蔵に忠実な(イ)系統の版と推測され、法然院本は(ロ)・(ハ)と同版の忍激刊附点本であり、上越大本は(イ)と同版後印の無点本である。注目すべきは、法然院本と上越大本で異なる版が収録されている点であり、これは槧蔵の入れ版と改刻の問題を考える上で、極めて興味深い現象である。そもそも入れ版は、本来、宝蔵院で覆嘉興蔵版に改刻するまでの一時しのぎであるから、普通に考えれば、ある時期に刷印された槧蔵中で入れ版されていた典籍は、それ以前に刷印された槧蔵においても同様に入れ版されていたはずである。よつて、元禄期の法然院本が入れ版であれば、それ以前の正明寺本もやはり入れ版だったはずである。それにもかかわらず、正明寺本の丁数は忍激刊附点本ではなく、無点本と一致する。もし正明寺本が(イ)や上越大本と同版の無点本であるとしたら、槧蔵では最初無点本を収録して、まもなく忍激刊附点本を入れ版し、さらに後になって再び無点本に戻したことになる、問題はさらに混乱の度を深めることになる。確かなことは、槧蔵では物によつて無点本か附点本いずれかの版が収録されていたということである。これが刷印・納入の時期による違いなのか、はたまた納入先による違いなのかについ

ては、檜蔵の入れ版問題を考える上で大変重要である。

さて、檜蔵によって収録版本が異なる理由については、次節で論じることにして、ここで成本三点が檜蔵の離れ本か否かについて結論しておこう。まず(イ)は上越大本との刷印時期の関係から、文政期以前に刷られた檜蔵の離れ本と見てよいであろう。一方、(ロ)・(ハ)は、法然院本の例から見て、一時期檜蔵に入れ版されたことのある版木であることは確かであるが、(ハ)は先述の隆栄校記から考えて檜蔵の離れ本ではあり得ない。(ロ)も次の点から檜蔵の離れ本ではないと考えられる。

それは、(ロ) (ハ)も同じだが、が大蔵経を構成するための重要な要素のひとつである千字文に対する配慮を欠いている点である。檜蔵では、どこにどういった経巻があるかが一目瞭然となるように、一冊に異なる千字文が入ることのないように配慮されており、このように分冊してはじめて、大蔵経という膨大な叢書において千字文の検索ツールとしての機能を十分に生かすことができるようになるのである。『俱舎論』を見ると、檜蔵所収本の冊数はいずれも九冊であり、千字文一字ごとに上中下の三冊に分冊され、「楼」・「観」・「飛」それぞれ上冊三巻・中冊三巻・下冊四巻となっている。『俱舎論』は全三十巻だから、普通であれば、一冊三巻で十分冊にした方が各冊の丁数にも、さほどばらつきをささずすむ。なおかつ単行本であれば、出版者にしる購入者にしる、千字文はあまり意味がないから、九分冊にこだわる必然性もない。にもかかわらずあえて九分冊を採るのは、千字文の検索ツールとしての機能を重視し、一冊中に異なる千字文が同居するのを嫌ったためであり、例えば現在はいさも単行本のように収録されているとしても、それがかつては大蔵経の一部を構成していたことを暗示している。このような理由から、九冊本の体裁を持つものは檜蔵の離れ本と見てよいであろう。この点に着目すれば、(イ)は九冊本だからやはり檜蔵の離れ本だったと見て間違いない⁽¹⁵⁾。逆に、(ロ)・(ハ)は十冊本だから檜蔵とは関係なく刷られた可能性が高い。以上の点から(ロ)は最初から単行本として刷られたと見てよかる⁽¹⁶⁾。

三 忍激刊附点本の入れ版をめぐる

次に問題となるのは、忍激刊附点本の入れ版が法然院納入分に対してだけ行われたものだったのか否かという点である。もしそうでない場合、いつまで入れ版として使われたかについても考察する必要がある。この問題を解くためには、附点本の開版から刷印の経過を明らかにする必要がある。成三点や榮蔵所収本だけでなく、この版の流伝状況について広く調査しなくてはならない。今回調査したのは、内閣文庫一点・駒沢大学図書館四点・東京大学総合図書館二点・月山寺（茨城県桜川市）一点の計八点であり、いずれも同一の版木で刷られたものである⁽¹⁷⁾。まず八点の刊記・奥付を記そう。

内閣文庫

刊記「寛延四年辛未仲秋吉日／堺書肆北村佐兵衛梓⁽¹⁸⁾」（請求記号三一〇 四五、以下「内本」）

駒沢大学図書館

無刊記（請求記号H三三三 一、以下「駒本一」）

刊記「寛延四年辛未仲秋吉日／大阪書林 心齋橋通南本町北街 河内屋吉兵衛蔵板⁽¹⁹⁾」 奥付「発行／書林一江戸

日本橋通壹丁目 須原屋茂兵衛／同 浅草茅町二丁目 須原屋伊八／同 日本橋通二丁目 山城屋佐兵衛／同 本石

町十軒店 英大助／同 芝神明前 岡田屋嘉七／京都三條通升屋町 出雲寺文治郎／肥前佐賀白山町 紙屋惣右衛

門／大坂南久宝寺町 榎並屋小兵衛／同 心齋橋備後町 近江屋平助／同 心齋橋通南久宝寺町 伊丹屋善兵衛⁽²⁰⁾

（請求記号H三三三 一、以下「駒本二」）

刊記「寛延四年辛未仲秋吉日／大阪書林 心齋橋通南本町北街 河内屋吉兵衛蔵板⁽²¹⁾」 奥付「弘化二 乙／己

歳四月／書林一京都寺町五條上ル／前川市兵衛／大阪心齋橋通比久太郎町／河内屋喜兵衛／同 心齋橋通唐物町／河

内屋記一兵衛（請求記号H三三三 二一A、以下「駒本二」）

刊記「明治十五年十月 求版ノ 下京区第廿三組花屋町通油小路東工入ル / 京都書林 永田調兵衛」（請求記号H三三三 三、以下「駒本四」）

東京大学総合図書館

無刊記（請求記号C四〇 三三、以下「東總本一」）

駒本四に同じ（請求記号C四〇 二二四一、以下「東總本二」）

曙光山月山寺

無刊記（月山寺四十六世純映旧蔵本、以下「月山寺純映本」）

内本、駒本二・三・四、東總本二の刊記の所在はいずれも巻第三十第十六丁裏である。刊記・奥付のある印本について見ると、内本は寛延四年（一七五一）堺北村佐兵衛印本である。その後、駒本二・三より以前に、版木が北村佐兵衛から一旦大坂の河内屋吉兵衛に移り、刊記から北村の住所・姓名が削られ、河内屋の名が埋木された。駒本二・三・四、東總本二は隆栄の改点校修本であり、駒本三は奥付に弘化二年（一八四五）に大坂河内屋記一兵衛等三名が刷った旨が記されるから、隆栄による改点校修を企画したのは、彼らだったと見てよからう。なお河内屋吉兵衛は大体文化年間以降（一八〇四）活動した書林であるから、²⁰彼が版木を入手したのは弘化二年に改点校修される以前の四十一年間にあると推測される。よって彼の名義で刷られた、いまだ改点校修を経ていない印本も存在した可能性があるが、²¹実見してはいない。改点校修後、不明年に大坂伊丹屋善兵衛等十名によって刷られたのが駒本二であり、明治十五年に永田調兵衛によって刷られたのが駒本四・東總本二であり、東總本二には永田調兵衛の蔵板目録が附されている。

次に、刊記・奥付のない駒本一・東總本一・月山寺純映本を見てみよう。これらがいつ頃刷られたものかを推定するには、版面の状態を比較する必要がある。本稿末【俱舎論附点本版面状態対照表】を見てみると、巻第一第一丁表匡郭左辺の傷が

(口)・月山寺純映本では一箇所、その他の諸本では二箇所、巻第二十一第十九丁裏の左辺の傷が諸本皆一箇所、巻第三十第六丁表右辺の傷が(口)・東總本一・月山寺純映本では二箇所、その他の諸本では三箇所なのに対し、駒本一にはいずれにも傷がない。このように、駒本一は版面の傷が最も少ないことから、最も早印と見られる。(口)・月山寺純映本は、駒本一の次に傷が少なく、ほぼ同時期の刷りと見られ、なおかつ月山寺純映本の巻末にはまま享保四年五台山清涼寺明王院素光の校記が見られるから、両本とも享保四年以前の刷りと見てよい。東總本一は、この両本に次いで傷が少なく、これに次いで傷の少ないのが内本であるから、(口)及び月山寺純映本と、内本との間に刷られたものである。内本以降は先述の通りである。

注目すべきは、附点本に必ず存在する忍激刊語(巻第三十第十六丁表、本稿末【書影2】)が、駒本一では同じ天和三年四月八日の記でありながら、内容に若干の差違が見られ、「阿毘達磨俱舍論三十巻請維東獅嶽升蓮社/蔵本刊行 天和三年歳次癸亥卯月八日」に作る点である(本稿末【書影1】)。最も大きな違いは、刊行の経緯について、他の刊語では「以洛東獅谷升蓮社蔵本鏤梓行世」に作る点を、「請維東獅嶽升蓮社蔵本刊行」に作る点と、前者では「信/阿」・「忍激/之印」の墨刷印記があつて、明確に忍激の刊行であることを謳っているのに対し、後者では墨刷印記がなく、刊行主体が明示されていない点である。駒本一は先述のように今回調査した中で最も早い時期に刷られた附点本であるから、この型の刊語を持つ版本は「以洛東獅谷升蓮社蔵本鏤梓行世」型の刊語を持つ版本よりも早印ということになる。つまり刊語の埋め換え時に、忍激が刊行者として明示されるようになったのである。また法然院本の刊語は「以…鏤梓行世」型であるから、埋め換えの時期は法然院本が刷られる以前のことであり、駒本一はそれよりも早い時期の印本なのである。そればかりか、駒本一の刊語にも埋木の痕跡がはつきりと見てとれることから、埋木のない状態で刷られた印本が存在した可能性すらあるのである。駒本一は一冊二巻全十五冊の装丁であるから、先述の槩蔵の特徴のひとつ、千字文ごとに分冊するという体裁に従っていない。これが原装だとは断言できないが、もしそうだとすると、法然院の槩蔵に入れ版される以前に、この刊語を持つ

印本が単行していたことになる。

四 『達摩多羅禅経』・『成実論』の覆嘉興蔵版二種

ここで、覆嘉興蔵版、天和年間、洛東獅谷升蓮社、忍激、附点本の二種の刊語をキーワードにして、『俱舍論』以外の経典に広く目を転じると、これらのキーワードに当てはまる経典を、法然院本中にも二点見いだすことができる。すでに松永氏によつて紹介されているが、一つは『達摩多羅禅経』であり、もう一つは『成実論』である。²²松永氏は『達摩多羅禅経』の刊語に「白蓮社蔵本とせずに升蓮社とあるところから、忍激所持本の『万曆版』をもつて天和二年（一六八二）に刊行したことになる」と論じ、檠蔵では「はじめ欠経となっていたのであるつか」と述べる。しかしながら、その後、松永氏自身の調査によつて、この三経が初期の刷りである正明寺所蔵の檠蔵に収録されていることが判明した。正明寺への施入が完了した天和元年には、いまだ三経の附点本は開版されていない上に、正明寺本『俱舍論』の丁数は先述のように附点本と一致せず、無点本と一致する。²³そこで、まず『達摩多羅禅経』と『成実論』の覆嘉興蔵版の出版状況を確認した上で、法然院本前後に刷られた檠蔵における三経の収録状況について考察し、附点本入れ版の実態に迫つてみたい。

『達摩多羅禅経』には、『俱舍論』と同様、升蓮社蔵本を底本とした附点本と、無点本という二種の覆嘉興蔵版がある。法然院には附点本が所蔵され、『法然院檠蔵目録』の書影によれば、巻下第三十五丁裏末行の末題に続けて小字双行で「請維東獅嶽升蓮社蔵本刊行ノ天和二年歳次壬戌臘月八日」の刊語が見える。この刊語の文面は、『俱舍論』の駒本一と同型である。その後印本に東京大学東洋文化研究所蔵本がある（以下「東文研本」）。『東京大学東洋文化研究所漢籍分類目録』には「天和二年京都興文閣拋維東獅嶽升蓮社蔵本景刊」と著録されることから、三経の附点本は興文閣刊行かと疑われたが、調査の結果、刊語・版面の状態が法然院本よりかなり傷んでいることから、同版の後印本であることがわかった。後印者は、

刊語の次丁に「平安書肆 興文閣蔵版目録」ではじまる蔵版目録があり、末に「京 小川源兵衛版」とあることから、元文天保間（一七三六―一八四四）に京都で活動した興文閣小川源兵衛である。²⁴ 蔵版目録には「達磨禅経」のみ著録され（第一丁裏第二行目上段）、他の二経は著録されないから、小川源兵衛は三経のうち『達磨多羅禅経』の版木だけ収蔵していたと見られる。さらに、この後印本によって、『達磨多羅禅経』の刊語が、『俱舍論』の駒本一と同様、埋木であることが判明した。刊語は法然院本が刷られた当時から埋木されていたに違いないが、相当精巧だったようで、『法然院藏目録』の書影を見る限り埋木には見えない。しかし東文研本では刊語の前行にある音釈にカスレがあり、かつ刊語「獅」字と次行の「次」字に渡って大きな亀裂（法然院本では線状の傷）が入っており、それにもかかわらず、亀裂は音釈まで渡っていない（本稿末【書影3】）。版面にカスレが見えるのは版木に凹凸が生じたからであり、このカスレが初刷りの頃なかつたのは版木の凹凸が後印される過程で生じたからである。もし一枚の版木に雕られたものであつたならば、このような凹凸が生じるはずはないし、刊語の亀裂も音釈にまで至っているはずである。これは刊語がもともと埋木だったことを物語るものである。一方、無点本は月山寺・上越教育大学に所蔵される。版面を比較すると、両本は同版で上越大本が後印である。巻下は附点本とは異なつて第三十六丁表まであり、第三十五丁裏は本文の終わる五行目以降印字されず、次丁の表に音釈と墨丁が刷られている。²⁵ 東京大学総合図書館所蔵の嘉興蔵版（崇禎五年径山化城寺刊本）の巻下の丁数は三十六丁で無点本と一致するから、『俱舍論』の場合と同様、無点本は嘉興蔵版を忠実に覆刻したといえるのに対し、附点本はおそらく丁数減らしの目的で音釈・末題を第三十五丁に押し込んだのである。

『成実論』にも、升蓮社蔵本を底本とした附点本と、無点本という二種の覆嘉興蔵版がある。法然院には附点本が所蔵され、その後印本（文政九年修明治中京都貝葉書院印本）が東京大学総合図書館に所蔵される。附点本の刊語は「成実論凡二十卷以洛東獅谷升蓮社ノ蔵本鏤梓行世ノ天和癸亥七月初八之日」、末に「信ノ阿」「忍激ノ之印」の墨刷印記があり、これらは両本の版面の状態から、埋木ではなく、もともと版木に雕られていたものと見られる（本稿末【書影4】）。一方、無点本

は月山寺・上越教育大学・東京大学東洋文化研究所に所蔵される。版面を比較すると、三本は同版で、月山寺本が最も早印、東文研本が最も後印である。巻第二十第二十五丁裏は、三本とも匡郭右辺までしか刷られておらず、月山寺本では続けて槃蔵の寄進者である了翁（一六三〇～一七〇七）の発願文が朱刷りされている。この発願文には貞享三年（一六八六）に東叡山勸学院で記したと見えることから、この無点本はそれ以前の刷りである。また『俱舎論』・『達摩多羅禪經』の場合と同様、附点本と無点本には丁数に異同があり、附点本は巻第四第十第十八において無点本に比べ一丁少ない。内閣文庫所蔵の嘉興蔵版（万曆四十二年四十四年径山化城寺刊本）の丁数は東文研蔵の無点本と一致するから、無点本は嘉興蔵版を忠実に覆刻したといえるのに対し、附点本ではおそらく丁数減らしの目的で音釈・末題を前丁に押し込んだのである。

ここで注目すべきは、月山寺の槃蔵収録本である。この槃蔵は、『月山寺槃蔵目録』の渡辺氏「調査報告」によれば、貞享三年十二月から元禄五年（一六九二）二月にかけて了翁によって寄進されたもので、法然院蔵の槃蔵とほぼ同時期か、やや早い時期の刷り本と見られ、初刷りの正明寺本から文政期の上越大本に至るまでの槃蔵の構成内容の変遷を知る上で大変貴重なものである。そこで法然院本と同時期の槃蔵において『俱舎論』・『達摩多羅禪經』・『成実論』がどのような版で納入されていたかを、この月山寺本を通して考えてみたい。

月山寺の槃蔵では『俱舎論』を欠くものの、『達摩多羅禪經』・『成実論』の二經を無点本で所蔵するから、『俱舎論』も無点本が納入された可能性は高いと見てよいであろう。本稿末の【達摩多羅禪經・俱舎論・成実論諸本丁数異同表】は三經のうち版本によって丁数に異同のある巻を対照したものである。この表から月山寺本『達摩多羅禪經』・『成実論』の丁数が正明寺本・上越大本と一致することがわかる。加えて月山寺本『俱舎論』も上越大本と同版の無点本だったと推測すると、三經の無点本は、上越大本のはるか以前、月山寺本の当時から開版されていたことになろう。これは、初刷りの正明寺本にあつても月山寺本と同版の無点本が収録されていたとの推測を補強するものであり、言い換えれば、無点本は、附点本が法然院に納入されるよりも前に、すでに開版されていたことになる。要するに、槃蔵出版の歴史において、三經の納入は、法

然院本を除き、その当初から一貫して無点本によって行われていたのであって、結局、附点本の入れ版は法然院本に対してのみ行われたと結論するのが妥当なのである。

さて、最後に附点本の開版について少し考察しておきたい。

『俱舍論』・『達摩多羅禅経』・『成実論』の附点本は、いずれも升蓮社蔵本の重刊本である点、ままた数減らしが行われている点、ともに法然院の壁蔵に入れ版されている点等、共通する部分が多いことから、もともと三経一セットでの開版が企画されたと考え得る。その出版は最終的には忍激が主持したと見てよからうが、初めに開版を企画した人物はおそらく別にある。

『達摩多羅禅経』と『俱舍論』の駒本一の刊語に「請維東獅嶽升蓮社蔵本刊行」(以下「刊語A」)とあるのによれば、忍激は附点本の底本となる所持本を提供した立場にあつて、刊行者ではない。『達摩多羅禅経』の後印本には刊語の埋め換えは見られないが、『俱舍論』駒本一以降の印本では刊語が「以洛東獅谷升蓮社蔵本鏤梓行世」(以下「刊語B」)に埋め換えられ、忍激の墨刷印記が加えられている。『成実論』では、『俱舍論』と同様、刊語Bと墨刷印記を持つが、ともに埋木ではなく、最初から版木に彫り込まれている。『成実論』が他の二経と同じ経緯で開版されたことは明らかであるにもかかわらず、これだけ埋木でないのである。三経の刊語に記された刊年と、それぞれの型の刊語が用いられているかを図式化したものが、本稿末の【附点本刊語対照表】である。『俱舍論』の刊語AとBにはとも天和三年四月の記が刻されているが、刊語Aを持つ駒本一の版面の状態を、刊語Bのなかで比較的早くに刷られた法然院本や成本(口)と比べると、痛みや傷の具合に変化が見られることから、刊語Bに埋め換え後の印本は天和三年四月より一定期間すぎから刷られたものである。また、もし『俱舍論』の刊語の埋め換えが『成実論』の完成以後であつたとすれば、『成実論』も一度は刊語Aで刷られていてもよいのに、実際は刊語Bが最初から版木に彫り込まれている。この点からすると、『俱舍論』の刊語の埋め換えは『成実論』刊行より前であつた可能性が高い。以上の理由から、この埋め換えが行われた時期は、刊語Aの刻された天和三

年四月を一応その上限とすると、その下限は『成実論』の刊行された天和三年七月と推測されるのである。

刊語の埋め換えが必要になったのは、天和三年四月から七月までの間に発行主体に変更があったためであろう。何故かという、刊語Aでは「維東獅嶽升蓮社藏本を請うて刊行す」とあって、何者かが忍澁藏本を借りて刊行したのに対し、刊語Bでは「洛東獅谷升蓮社藏本を以て鑲梓して世に行う」とあるうえ、忍澁の墨刷印記もあることから、忍澁が出版を主持したように受け取れるからである。おそらく最初は法然院か、法然院外の何者かが忍澁所蔵の三経に目をつけ、その重刊を計画したものの、何らかの理由で天和三年四月から七月の間に忍澁自身が発行を主持するようになり、それに伴って『俱舍論』の刊語がAからBへと埋め換えられたものと思われる。

ただ、そう仮定した場合、何故『達摩多羅禅経』だけ刊語Bへ埋め換えられなかったのが問題となる。これは、江戸時代に頻繁に見られる版木の売買がかかわっている。おそらく『俱舍論』の刊語の埋め換えがされた時には、『達摩多羅禅経』がすでに一部数刷り終わって、版木が他者に売却されていたため、『達摩多羅禅経』の版木はすでに開板者の手元になく、刊語を直したくても直せなかったのではなからうか。これに対し、開版が四ヶ月ほど遅れた『俱舍論』の版木は、『成実論』開版当時まだ手元にあつたため、『成実論』に合わせて埋め換えが行われたのであろう。

五 おわりに

『俱舍論』の覆嘉興藏版には無点本と附点本の二版がある。前者は黄檗山宝蔵院で檠蔵開版の当初から檠蔵中の一經典として印造され続けてきたものであり、後者は天和三年に何者かによって法然院の忍澁藏本を底本として開版されたものである。附点本は開版後もない時期に、刊語を忍澁を發行主体として明示するものに埋め換えた後、法然院に檠蔵を納入する際に入れ版された。しかし、それはあくまで一時的なもので、他の檠蔵には入れ版されなかったようである。その後、附点

本の版木は大坂の書林を転々とし、弘化二年には智積院隆栄によって改点校修が行われ、明治に至るまで印造され続けた。天和年間に升蓮社忍藏蔵本を底本に開版された附点本によって法然院の鑿蔵に入れ版されたものには、『俱舎論』の他、『達摩多羅禅経』・『成実論』がある。これに対し、他の鑿蔵では、最初期の刷り本である正明寺本以来、この三経は一貫して無点本が納入されている。それでは何故法然院にだけ附点本で納入されたのであろうか。

鑿蔵のなかには、嘉興蔵版による改刻が成った後でも、納入先の希望等によっては旧来の入れ版を使って納入するケースが確認されている。²⁶ 法然院本の場合もこれに準じたケースだったのではないかと推測される。整合性のある解釈を試みれば、初刷りの正明寺本の納入完了年は天和元年であるから、もしその時点で無点本の覆嘉興蔵版が完成していたのなら、それをそのまま法然院に納入すればよいわけである。それをわざわざ附点本で納入したのだとすれば、理由はひとつ、法然院側が附点本による納入を希望したに違いない。法然院がいつ宝蔵院に鑿蔵の購入を申し込んだかは定かではないものの、時期的に見て、すでに忍藏所蔵の三経を底本に用いた開版が計画されていた可能性は十分ある。そのため法然院から宝蔵院に対して、この附点本を鑿蔵の装丁に仕立てて納入してもらいたい旨伝えられていたのではなからうか。希望の動機はおそらく次のようなものであろう。

そもそも納入先の寺院にとっては、全蔵が嘉興蔵の覆刻本で取り揃えられることに必ずしも意義はなく、所属宗派・寺院が手塩にかけて刊行したテキストがあれば、覆嘉興蔵版を不要とみなす購入者が出て不思議ではない。まして法然院の忍藏は鑿蔵のテキストに問題が多いことをいち早く見抜き、建仁寺所蔵の高麗版大蔵経との校訂を行った人物である。²⁷ しかし、このような動機によって、その経典を購入リストからはずしてしまつと、はじめから一具の大蔵経中に欠経を作ることになつてしまふ。そこで各納入先が自前の版本（版木或いは化粧裁ちしていない刷り本）を宝蔵院に送り、鑿蔵一般と同じ装丁に仕立ててもらい、自己の鑿蔵に加えたのではないだろうか。

なお本稿中でも述べたように、『俱舎論』の弘化二年改点校修本では、隆栄の校記中に鑿蔵との校勘がなされている。同

じ嘉興蔵版を覆刻したはずの両書に本文の異同が存在するのであるから、嘉興蔵に二版あるのか、附点本の底本は本当に嘉興蔵版なのか、といった疑問が当然湧いてこよう。また同じ嘉興蔵版が底本だったとすると、附点本には忍激蔵本にもとづく本文の校改が加えられている可能性も出てくる。とすれば、法然院が附点本による納入を希望したのも、まさに忍激校点本であったからということになる。この問題に関しては、今後の課題としておきたい。

〔注〕

- (1) 宝蔵院については、松永知海「黄檗版大蔵経 版庫の移転を中心として」、『黄檗文華』第百十六号、一九九六年十二月)を参照。
- (2) 一般に明版大蔵経と呼ばれ、他に万曆版・楞嚴寺版の異称があり、初の方冊本大蔵経としても知られる。万曆十七年(一五八九)に密蔵道開等の主持で五台山紫霞谷妙徳庵で開版され、余杭径山の径山寺・興聖万寿禅寺・寂照庵・化城寺、嘉興府楞嚴寺等に開版地を移しつつ、崇禎十五年(一六四二)頃に正蔵が完成、康熙五年(一六六六)に続蔵が完成、康熙十五年に又続蔵が完成し、以後も康熙年間の未まで追加入蔵が行われたといわれる。
- (3) 大槻幹郎・加藤正俊・林雪光編「黄檗文化人名辞典」(思文閣出版、一九八八年十二月)、「鉄眼道光」條・大槻幹郎「黄檗版大蔵経の原本について」(『影印黄檗版大蔵経刊記集』(思文閣出版、一九九一年三月)所収)を参照。
- (4) 本稿の作成にあたっては、以下の諸論考及び黄檗版大蔵経の現存目録を参考にした。
 - 田代俊孝「越前丹山文庫所蔵麗蔵校合黄檗版一切経について」(『印度学仏教学研究』第三十卷第二号、一九八二年三月)
 - 『上越教育大学所蔵黄檗鉄眼版一切経目録』(上越教育大学附属図書館、一九八八年三月、以下『上越教育大学蔵目録』)
 - 『獅合法然院所蔵麗蔵對校黄檗版大蔵経並新続入蔵経目録』(仏教文化研究所、一九八九年十二月、以下『法然院蔵目録』)
 - 松永知海「『黄檗版大蔵経』刊記集解題」(『影印黄檗版大蔵経刊記集』所収)
 - 松永知海「『黄檗版大蔵経』の再評価」(『仏教史学研究』第34卷第2号、一九九一年十月)
 - 松永知海「『黄檗版大蔵経』の募縁刊記再考」(『印度学仏教学研究』第四十二卷第二号、一九九四年三月)
 - 松永知海「黄檗版大蔵経とわたし」(『仏教大学報』第47号、一九九七年九月)
 - 松永知海「黄檗宗寶蔵院所蔵版本について」とくに蔵外典籍を中心とした課題」(『香川孝雄博士古稀記念論集仏教学研究浄土学研究』永田文昌堂、二〇〇一年三月)
 - 内山純子・渡辺麻里子「曙光山月山寺了翁寄進鉄眼版一切経目録」(曙光山月山寺、二〇〇一年五月、以下『月山寺蔵目録』)
 - 野沢佳美「江戸時代における明版嘉興蔵輸入の影響について」(『立正大学東洋史論集』第13号、二〇〇一年九月)
 - 松永知海「『黄檗版大蔵経』の刊行について 入れ版を中心として」(『高橋弘次先生古稀記念論集浄土学仏教学論叢』第一巻、

二〇〇四年十一月)

松永知海「後水尾法皇下賜正明寺藏初刷『黄檗版大藏經』目録」(『仏教大学総合研究所紀要別冊附録』、仏教大学総合研究所、二〇〇四年十二月、以下「正明寺藏目録」)

(5) 本稿注(4)の諸論文・目録等を参照。なお拙稿「日本における『禅源諸詮集都序』の受容と出版」(『日本漢文学研究』創刊号、二〇〇六年三月)では、唐・宗密『禅源諸詮集都序』の覆五山版が寛永年間に開板されてから、檜藏印造の初期に入れ版され、まもなく嘉興蔵版の覆刻が成り、覆五山版の版木が書林に流れていく過程について考察した。

(6) 千字文は、巻第一至第十が「楼一」至「楼十」、巻第十一至第二十が「觀一」至「觀十」、巻第二十一至第三十が「飛一」至「飛十」である。

(7) 『日本仏教人名辞典』(法蔵館、一九九二年一月)三九四頁を参照。

(8) 松永氏『法然院檜藏目録』「解題」を参照。

(9) 『浄土宗全書』第拾八巻(浄土宗開宗八百年記念慶讃準備局、一九七一年六月)所収。

(10) 『日本仏教人名辞典』七九六頁を参照。

(11) 近年では、上越教育大学附属図書館による同館所蔵本(越前中頸城郡宮崎家旧蔵)の全蔵調査をはじめ、寺院や図書館等が所蔵する檜藏の現存目録を作成する際、この通番が必ずといっていいほど活用されている。なお『俱舍論』は二二六〇番が割り振られている。

(12) 『日本古典籍書誌学辞典』(岩波書店、一九九九年三月)松永知海「鉄眼版」條を参照。

(13) 松永氏『黄檗版大藏經』の刊行についてを参照。以下に述べる法然院本の納入年も同論文による。

(14) 例えば巻第三十八丁表匡郭左辺のへこみ、巻第九第二十一丁裏に界線あり、巻第二十六第二十一丁表匡郭右辺下方の傷等。

(15) (イ)の各冊には檜藏独特の題簽があり、そこには上から順に、論蔵を示す「論」字・書名・収録巻、続いて上中下三分冊の冊次、千字文が刷られている。これも(イ)が檜藏の離れ本であることの傍証といえよう。

(16) なお分冊は改装の際に変更されることがまあり、もと九分冊だったものが改装の際に十分冊された可能性がないとはいえない。(ロ)が原装のままだと断定はできないが、改装の際に分冊を変更したことを匂わせるような痕跡も特に見当たらない。

(17) なお立正大学図書館にも一点所蔵されるが、同館に問い合わせた結果、内閣文庫本と同印本であることが判明したため調査はしなかった。

(18) 以下、「」は刊記中その部分が埋木されていることを示し、「」は埋木中にさら埋木されていることを示す。

(19) 井上和雄『慶長以来書買集覧』(言論社、一九七八年六月覆刻、初版一九一六年彙文堂書店刊)によれば、河内屋記一兵衛は天保年間(一八三〇)一八四四)以降、前川市兵衛は寛政年間(一七八九)一八〇一)以降、河内屋喜兵衛は元文年間(一七三六)一七四一)以降近代にかけて活動した書肆である。なお同書の増訂版(坂本宗子増訂、高尾書店、一九七〇年十二月)では、河内屋喜兵衛の活動年を宝永年間(一七〇四)一七一一)以降、前川市兵衛の活動年を天明寛政間(一七八一)一八〇一)と修正する。前川の活動期間は本版の

奥付によって弘化二年までと修正すべきである。

- (20) 『慶長以来書買集覧』一三三頁を参照。
- (21) 『東北大学所蔵和漢書古典分類目録 漢籍』(東北大学附属図書館、一九七五年三月)によれば、狩野文庫に「寛延四年河内屋吉兵衛」(狩二・三〇七〇・一〇)なる本が所蔵されることであるが、改装等によって弘化二年の奥付が失われた可能性もある。
- (22) 『法然院燦蔵目録』「解題」を参照。
- (23) 「正明寺燦蔵目録」を参照。なお松永氏はこの三經について同書の解題で言及していない。
- (24) 小川源兵衛、松月堂、後に興文閣、京都寺町通六角下ル、に店を構えた。その活動期間については、『慶長以来書買集覧』では延享天保間(一七四四―一八四四)とするが(一六頁)、同書の増訂版で元文天保間に修正するのによつた(二六頁)。
- (25) 渡辺氏は『月山寺燦蔵目録』「月山寺蔵了翁寄進鉄眼版一切経調査報告」中で、『達摩多羅禅經』の丁数の問題に言及し、「法然院本の特徴とされている点が、元禄五年二月の月山寺本の時点で、すでに改版され、文政期の版本と同様の形式となっているといえよう」と述べる(一九四頁)。
- (26) 松永氏『黄檗版大蔵経』の刊行について「を参照。
- (27) 松永氏『法然院燦蔵目録』「解題」を参照。

附記 平成十六年十月に二松学舎大学COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」のCOE研究員に採用され、十一月に成田山仏教図書館で和刻本仏典の版本調査を開始し、翌年十月に完了した。本稿はその調査による成果の一部である。約一年にわたる調査に、終始こころよく御協力いただいた成田山仏教図書館の皆様方に厚く御礼申し上げたい。また曙光山月山寺住職光栄純貫師には同寺所蔵本の閲覧をお許しいただき、内山純子先生には調査に御同道いただき、『俱舍論』の旧蔵者月山寺四十六世純映について貴重な御教示を頂戴した。その他、閲覧・複写に当たっては、国立公文書館内閣文庫・東京大学総合図書館・同東洋文化研究所・駒沢大学図書館・立正大学図書館・上越教育大学附属図書館等にお世話になった。ここに記して謝意を表したい。

【俱舎論諸本丁数冊次対照表】

卷	嘉興蔵版		(イ)		(ロ)		(ハ)		正明寺本		法然院本		上越大本	
	丁数	冊次	丁数	冊次	丁数	冊次	丁数	冊次	丁数	冊次	丁数	冊次	丁数	冊次
1	22	1	22	1	22	1	22	1	22	1	不明	1	22	1
2	23+刊記		23		23		23		23		不明		23	
3	19		19■		19		19		19		不明		19	
4	20	2	20■	2	20	2	20	2	20	2	不明	2	20	2
5	22		22■		22		22		22		不明		22	
6	23	2	23	3	23	3	23	3	23	3	不明	3	23■	3
7	16+刊記		16		16		16		16		不明		16	
8	18		18■		17		17		17		18		不明	
9	22	3	22■	4	21	4	21	4	22	4	不明	4	22■	4
10	19		19		19		19		19		不明		19	
11	19	3	19	4	19	4	19	4	19	4	不明	4	19	4
12	19		19		19		19		19		不明		19	
13	18		18		18		18		18		不明		18	
14	20	5	20■	5	20	5	20	5	20	5	不明	5	20■	5
15	21		21■		21		21		21		不明		21	
16	18+刊記	4	18	6	18	6	18	6	18	6	不明	6	18	6
17	17		17		17		17		17		不明		17	
18	20		20■		20		20		20		不明		20	
19	20	5	20	7	20	7	20	7	20	7	不明	7	20■	7
20	16		16■		16		16		16		不明		16	
21	19	5	19■	7	19	7	19	7	19	7	不明	7	19■	7
22	18		18■		18		18		18		不明		18	
23	18		18		18		18		18		不明		18	
24	19	6	19	8	19	8	19	8	19	8	不明	8	19	8
25	20		20■		19		19		19		20		不明	
26	21	6	21■	9	21	9	21	9	21	9	不明	9	21■	9
27	18		18		18		18		18		不明		18	
28	19		19		19		19		19		不明		19	
29	18	6	18■	10	17	10	17	10	18	10	不明	10	18■	10
30	16		16■		16		16		16		不明		16	

凡例

- 一、嘉興蔵版「丁数」欄の「+刊記」は、本文丁数の他に刊記のみ刷られた丁が一丁あることを示す。
- 一、網掛は、その巻の丁数に版によって異同があることを示す。
- 一、「■」は、巻末に墨丁があることを示す。

【俱舎論無点本版状態対照表】

所在	版面の状態	(イ)	上越大本	駒大本H323/4	駒大本H323/4A	駒大本H323/4B
卷三18b	左辺のへこみ	有	有	有	有	有
卷三19a	墨丁	大	小	小	小	小
卷四20b	墨丁	大	無	無	無	無
卷五21b	左辺の太さ	細い	細い	細い	細い	細い
卷五22a	墨丁	大	小	小	小	小
卷六23b	墨丁	刷らず	小	小	小	小
卷八18a	墨丁	大	小	小	小	小
卷九21b	界線	有	有	有	有	有
卷九22a	墨丁	大	小	小	小	小
卷一〇19b	墨丁	刷らず	小	小	小	小
卷一一18b	左辺の傷	0	1?	1(小)	1(小)	1(小)
卷一二1a	右辺下部の傷	0	0	1	0	1
卷一二19b	墨丁	刷らず	小	小	小	小
卷一三18b	墨丁	刷らず	小	小	小	小
卷一四20b	墨丁	大	小	小	小	小
卷一五21a	右辺の傷	0	1	1	1	1
卷一五21a	墨丁	大	無	無	無	無
卷一七1a	右辺の傷	0	1	1	1	刷り損ない
卷一七17a	墨丁	大	無	無	無	無
卷一八20a	墨丁	大	小	小	小	小
卷一九20b	墨丁	刷らず	小	小	小	小
卷二〇16b	墨丁	大	無	無	無	無
卷二一19b	墨丁	小	小	小	小	小
卷二二18b	墨丁	小	小	小	小	小
卷二五20a	墨丁	小	小	小	小	小
卷二六21a	右辺の傷	1	3	3	3	3
卷二六21a	墨丁	小	小	小	小	小
卷二八18a	右辺上部の傷	1	1	2	1	2
卷二九18a	左辺の傷	0	0	1	1	1
卷二九18a	墨丁	小	小	小	小	小
卷三〇16a	墨丁	小	小	小	小	小

【俱舎論附点本版面状態対照表】

所在	版面の状態	(口)	(ハ)	法然院本	月山寺本	内本	駒本一	駒本三	駒本二	駒本四	東總本一	東總本二
卷一1a	左辺の傷	1	2	?	1	2	0	2	2	2	2	2
卷一2a	下辺の傷	0	1	?	0	1	0	1	1	1	1	1
卷一4a	右辺下部の傷	0	1	?	0	1	0	1	1	2	0	1
卷一4b	左辺上部の傷	0	1	?	0	1	0	1	1	1	0	1
卷一8a	上辺の傷	0	特大1	?	0	0	0	大1	特大1	特大1	0	特大1
卷一11a	上辺の傷	痛み	大1	?	痛み	痛み	痛み	大1	大1	大1	痛み	大1
卷一22a	左辺の傷	痛み	1	?	痛み	1	0	1	1	1	痛み	1
卷二1a	上辺の傷	0	1	?	0	0	0	1	1	1+大1	0	1+大1
卷二1a	右辺の傷	0	1	?	0	0	0	1	1	1	0	1
卷四20b	左辺の傷	1	2	?	1	1	1	欠	2	2	1	2
卷七16b	下辺の傷	中2	大1中1	?	中2	中2	中2 (口より小)	大1中1	大1中1	特大1中1	中2	特大1中1
卷一七1a	右辺の傷	0	大1	?	0	大1	0	大1	大1小1	大1小1	小2(線状)	大1小1
卷一七17a	左辺の傷	0	2	?	0	1	0	2	2	2	0	2
卷一九1a	右辺の傷	0	1	?	1	1	0	1	1	1	0	1
卷二一1a	右辺の傷	0	2	?	0	1	0	2	2 (ハに同じ)	1	1	1
卷二一19b	左辺の傷	中1	中1	?	中1	中1	0	中1	中1	中1	中1	中1
卷二六20b	左辺の傷	1	2	?	1	2	1 (口より小)	2	2	2	2	2
卷二九17b	右辺の傷	0	1	?	0	0	0	1	1	1	0	1
卷三〇6a	右辺の傷	2	3	?	2	3	0	3	3	3	2	3
卷三〇8a	右辺の傷	0	3	?	0	3	0	3	3	3	0	3
卷三〇15b	左辺下部の傷	痛み	大1	?	痛み	大1	痛み	大1	大1	大1	大1	大1
卷三〇16a	左辺中程の傷	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有

【達摩多羅禪經・俱舍論・成実論諸本丁数異同表】

書名	卷次	嘉興蔵版	正明寺本	月山寺本	上越大本	付点本	
						法然院本	忍激刊本
達摩多羅禪經	卷下	36	36	36	36	35	35
俱舍論	卷8	18	18	欠	18	(17)	17
	卷9	22	22	欠	22	(21)	21
	卷25	20	20	欠	20	(19)	19
	卷29	18	18	欠	18	(17)	17
成実論	卷4	27	27	27	27	(26)	26
	卷10	32	32	32	32	(31)	31
	卷18	26	26	26	26	(25)	25

凡例

- 一、嘉興蔵版の各卷に刊語があるが、ここに挙げた中には刊語だけ刷られた丁はない。
 一、網掛してある部分は、無点本であることが確認できているものである。
 一、「()」内の丁数は、同版本によって推測したものである。

【附点本刊語対照表】

刷順	書名	刊語の刊年	刊語の状態		
			原型	刊語A型	刊語B型
①	達摩多羅禪經	天和二年十二月	不明	埋木	×
②	俱舍論早印	天和三年四月	不明	埋木	×
?	俱舍論後印	天和三年四月	不明	×	埋木
③	成実論	天和三年七月	—	×	○

凡例

- 一、「俱舍論早印」は、駒本一のことである。
 一、「不明」は、埋木される以前の状態がわからないことを示す。
 一、「—」は、刊語が埋木でなく最初から彫り込まれていることを示す。
 一、刊語が埋木の場合は、「埋木」と記し、最初から彫り込まれている場合は「○」を記した。

